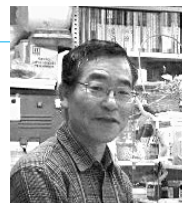


有機農業推進班だより

南阿蘇村環境保全農業推進協議会発足おめでとうございます

東海大学農学部教授 片野 學



本協議会の立ちあげに向け、ご尽力いただいた東海大学農学部片野學教授からお言葉をいただきましたので、紹介します。

私は、昭和59年（1984年）3月、日本中の実施農家の皆さま方と、自然農法稲作栽培技術を作り上げるために九州東海大学農学部で勤務し、29年目を迎えています。幸いにも農学部から最寄りの久石地区で、帆足洋子さんと甲斐美千代さんが自然農法稲作を実施しており、お二人の12枚の水田で栽培されていた稲の生育、収量、器官別乾物重、根系形態、73品種の栽培試験、水田で発生する雑草、土壌化学性など、専攻学生諸君と総力を挙げて調査研究を始めました。イナワラ堆肥施用の帆足乾田では、手押し除草機1回押しだけで雑草生育はほとんど見られず、品種・ヤエホの精玄米収量も8〜9俵台に達し、一方、帆足強湿田では雑草は取れども取れども次々に発生し、収量も4〜5俵台でした。雑草生育極小↓収量大、雑草生育甚大↓収量少という興味深い関係から雑草は、固く・冷たい死んだ土を、柔らかく・暖かい生きた土にするために生えてくるのではないかとというヒントをいただきました。白川河畔で旺盛に生育するヨシの下の土壌には水田雑草は一本もありません。人間の手で自然の河川湖沼生態系で息づく生きている土を作れば、雑草は生えてこないのではないかとという仮説が生まれ、59年、イナワラの新しい還元法を実践していた岩手県の実証されました。自然の稲は田植えから1か月後、分けつが発生し

ないことが一番心配なのですが、帆足乾田移植34日後の草丈は31・5cmでした。しかし、縦直下型の根系は深さ30cmまで伸長しており、それまでの横紡錘形浅型の教科書的知見とは全く違うことも発見でき、心配する必要がないことも明らかにできました。帆足さんに習い、桐原輝美さん（両併）のお母さんが自然農法を始め、やがて、おあす米生産組合誕生へとつながっていきましました。当時、吉良清一さん（両併）をはじめ、オアシス農業運動に取り組んでいた若者たちが市下神社近くの水田で無農薬有機稲作を始めたのは昭和63年だったでしょうか。昭和60年代、ヨーロッパのバイオダイナミック農法の継承者であるピリオ・ドニーさん（河陽）一家と、有機農業新規就農者を目指して、高島和子さん（河陽）一家が旧長陽村に移住してきました。農学部が隣接した阿蘇菜園ハーブの里では井澤敏さん（河陽）も有機農業に取り組んでいました。平成に入り、EM自然農法に取り組んでいた竹山哲也さん（河陽）たちは南阿蘇有機ニンニク栽培グループを、笠野眞喜さん（河陽）も有機稲作を始め、山田錦で自然焼酎を作りました。私にとって協議会発足は感無量です。

環境保全農業は環境にやさしいだけでなく、何よりも、この農業によって得られた農産物と農産加工品をいただくことによつて、農家自身の健康が維持・増進され心と体が健やかになり、毎日が楽しくなることではないでしょうか。南阿蘇住民がこぞつてこの農業を推進し、その恩恵にあずかれることを期待します。

南阿蘇村型特別農産物(仮称) 愛称募集!!

村環境保全農業推進協議会では、「おいしい、安全・安心、自然・環境を守る」をモットーに、南阿蘇村の農産物生産、販売を行うために、新たに村独自の認証基準を設け南阿蘇村型特別農産物(仮称)として、地域ブランド化、有利販売につなげていけるよう計画中です。

そこで、認証された農産物に対し、生産者や消費者の皆さんに親しまれやすい名称を募集します。※認証農産物には、シンボルマークとして、南阿蘇村地産地消推進協議会イメージキャラクターの「かなばあちゃん」シールを貼り付ける予定。結果は、広報やホームページで発表します。

■募集する愛称

① 化学合成農薬、化学合成肥料を不使用の農産物。

② 化学合成農薬、化学合成肥料の使用を慣行農法より50%以下に削減した農産物。

■応募期限 6月29日(金) 必着

●採用された方には記念品を進呈。

●応募はお1人さまにつき愛称1つです。(必要事項の記載に不備があった場合はお受けできません。)

●採用された愛称に関する権利は、本協議会に帰属します。

■申込み方法 必要事項を記入のうえ、事務局設置の専用用紙、または当協議会へ電子メールで送信してください。

■必要事項 愛称2種類・愛称の説明・住所・氏名(フリガナ)・年齢・電話番号・職業又は学校名

■個人情報の取り扱い 応募者の個人情報は、この愛称募集企画以外には利用しません。

■申し込み先

南阿蘇村環境保全農業推進協議会事務局(役場白水庁舎 農政課有機農業推進班)

TEL(62)9113

Email kampo@aso.ne.jp

